

台湾海峡兩岸つないだ「日本語族」の絆

藤原 秀人

「台湾有事」が現実味を帯びたかのように語られるようになって久しい。台湾海峡兩岸関係は悪化の一途をたどっているように見えるが、底流には経済や文化などでパイプもある。私が最も印象に残るのは、台湾出身者の強い絆だ。

中国人民政治協商会議の副主席を務めた張克輝氏が 2024 年 1 月 11 日、北京で死亡した。96 歳だった。翌日付の中国共産党機関紙人民日報は 1 面に「著名な社会活動家 台湾民主自治同盟の傑出した指導者 中国共産党優秀党員 張克輝同志逝去」の見出しで張氏の死去を報じた。台湾民主自治同盟は共産党の指導下にある民主党派の一つである。人民政治協商会議の副主席は副首相級の国家指導者とされるので、人民日報が 1 面で報じたのは当然だ。だが、日本では著名ではなかったためか、私が調べた限りでは、日本のメディアは張氏の死去を伝えなかった。

張氏は日本統治下の台湾中部彰化で生まれ育った。日本の敗戦後に中国大陸に渡り福建省の厦門大学に進み、共産党の活動に加わり国民党と戦った。張氏にその訳を尋ねたことがある。「腐敗した国民党では台湾は救えないと確信した。共産党に入ったのも自然な流れだった」。

福建省で長らく統一戦線活動に従事した張氏は、日本統治時代に身に付いた日本語の能力を見込まれ、日本との交流活動にも広く関わった。

「稲尾さんとは仲良かったですよ」。雑談のなかでこう聞かされた時、「あの稲尾さんですか」と思わず聞き返した。比類の怪腕ぶりから「神様、仏様、稲尾様」と呼ばれた稲尾和久投手だ。大陸では馴染みの薄い野球だったが、日本統治下の台湾で体験していた張氏は中国での普及を考えていた。日本の知人の紹介で知り合った稲尾氏が引退後に指導し

ていた日本の企業チームを福建省に招いた。張氏が北京に異動してからも稲尾氏との交流は続き、稲尾氏は新興の北京市チームの指導もした。

そんな張氏に私が最初に会ったのは、1996 年の初冬だった。当時の張氏は中国大陸在住の台湾出身者の集まりである中華全国台湾同胞聯誼会（全国台聯）の会長だった。台湾との統一工作で重要な役割を担っていたが、不勉強で会う直前までは名前すら知らなかった。その張氏を紹介してくれたのは、まさかの人物だった。

私はこの年の夏に新聞社の香港支局から北京支局に異動になった。当時は台北に支局がなく、香港支局が台湾報道を担当していた。総統だった李登輝氏の訪米や初の総統直接選挙、中国の度重なる台湾に照準を合わせた軍事演習など取材すべきことは山ほどあった。だから香港時代は台湾に毎月のように出張していた。

台湾出張のたびに会っていたひとりが蔡焜燦氏だった。司馬遼太郎の「台湾紀行」に登場する司馬の台湾案内人「老台北」その人である。蔡氏とは 1994 年春に知人の紹介で初めて台北の国賓大飯店で会った。

蔡氏は初対面の私に台湾の歴史や中国や日本への思いを日本語で一気に話した。博覧強記という言葉がしっくりくる人だった。その後も会うたびにほとんど私が聞き役で、講義を受けているような気がしていた。日本の敗戦で台湾を接収した国民党についての批判が多かった。国民党に勝利して大陸を統治する共産党についても、「金と権力への執着心は国民党と同じで、独裁者との統一は悪夢で絶対反対だ」などと話し、厳しかった。

その蔡氏に異動前にあいさつした際、北京で待ち受けるに違いないと思った取材の難しさをぼやい

た。蔡氏は張氏の電話番号を教えてくれた。蔡氏が日本統治時代に学んだ彰化商業学校の一歳下の同窓だという。共産党嫌いの蔡氏からそんな話が出るとは夢にも思わなかった。電話番号は張氏の執務室の机上の電話のものだという。

私は北京で働くようになってすぐには張氏に電話しなかった。蔡氏の話を書いたのではない。北京で働く外国人記者はすべて当局の監視対象だ。着任直後は監視がとりわけ厳しいから特異な動きはしない、というのが引継ぎにあった。

着任して数カ月たった後に電話をした。本人は出なかった。二度目も出なかったが、応じた相手に簡単に自己紹介した。「台湾の蔡氏の紹介だ」と。三度目の電話に「張です」と日本語で出た。会いたい旨を伝えると「蔡先輩の紹介なら会わないわけにはいきませんね」と応じた。

北京市中心部にあった執務室で会った張氏は鉛筆で何やら書き物をしていた。「お忙しい所ありがとうございます」とあいさつをしたら、「シナリオを書いているところです」という意外な話が始まった。後で知ったことだが、張氏は本業の台湾統一工作のほか、台湾を舞台にした小説や脚本を多く書いていて、映画化された「台湾往事」は日本でも公開された。ドラマ「大地の子」で主人公陸一心の妻役だった蔣文麗が出演して話題にもなった。

張氏に聞きたいことは山ほどあったが、何から聞いていいのかまとまらず、「大陸嫌いの蔡さんとは立場が違いすぎますが」と切り出した。張氏はからからと笑って「故郷台湾への愛情は同じです」。

兩岸関係は大陸の改革開放や台湾側の一方的な内戦終結宣言などを経て、交流が広がっていたが、台湾当局は張氏のような中国高官の帰省を認めていなかった。張氏の母親が1992年に死去した時も台湾での葬儀には妻が代理で出た。その際に歓待したのが蔡氏ら彰化商業学校の同窓生だった。翌年に父親が死去した際には、蔡氏ら超党派の当局への働きかけもあって張氏の台湾を離れてから初めての帰郷が実現した。「長男として父の葬儀に参列できた。蔡さんには本当に感謝している」と語った。

「日本語を母語のように話していたが、日本人の上級生に『チャンコロ』といわれ訳もなく殴られた。

台湾人は奴隷だと思った」と張氏。蔡氏も中国人を蔑称する「チャンコロ」と呼んだ日本人と殴り合ったことはあったが「仲直りできた」。二人の日本への思いは異なるが、連絡は取り続けていたのだった。蔡氏は「日本統治下に日本語で育った『日本語族』の絆」と呼んでいた。張氏も「日本語で考えてから電子辞書を駆使して中国語に訳す」と話していた。

中国が2005年に台湾独立阻止のために武力の使用を辞さないとする「反国家分裂法」を採択した際に、兩岸関係は緊張した。この時も北京に駐在していた私の前で、張氏は採択前の原案のコピーを手にしなが「蔡さんは怒っているに違いないだろうが、平和統一を目指すのが本当の狙いだ」と語っていた。実際、台湾では蔡氏だけでなく超党派で法案に反対していた。二人の関係はどうなるのか、と一抹の不安を覚えた。しかし、張氏が2009年に台湾を再訪した際には、蔡氏は同窓生らと歓迎した。絆は切れていなかった。

張氏以外にも台湾にゆかりのある人々に北京で会った。台湾生まれで神戸育ち、毛沢東や周恩来の日本語通訳を務め党中央委員にも選ばれたこともある林麗韞氏は、なんと蔡焜燦氏のいとこだった。台湾民主自治同盟で張氏の前の主席だった蔡子民氏は彰化出身で早稲田大学で学んだ。旧制一高を卒業し毛沢東の著作の日本語訳をした郭承敏氏は台湾南端の恒春出身。アトランタ五輪でソフトボールチームを銀メダルに導いた監督、李敏寛氏は台湾出身の父と日本人の母の間に大阪で生まれ、高校を中退して大陸に渡った。張氏の下で長く働いた。

兩岸をつないだ台湾ゆかりの人々も今では数少なくなった。蔡焜燦氏は張氏の前に2017年に死去した。両氏らの絆の意味を噛みしめつつ、兩岸関係の底流を凝視している。

*張克輝氏の功績を伝える『人民日報』(2024年1月18日付)

http://paper.people.com.cn/rmrb/html/2024-01/18/nw.D110000renmrb_20240118_1-04.htm

(ふじわら ひでひと・ジャーナリスト)